

# ウイメンズ ブックス

第31号

1989年

5月20日発行

(年会費 1,800円)

Women's Books

ウイメンズ ブックストア

発行所 有限会社 松香堂書店

602 京都市上京区下立売通西洞院西入る

TEL.FAX 075-441-6905

振替貯金口座 京都8-7950

—女性の本と女性の為の情報をお知らせするウイメンズブック友の会会報—

## ウイメンズブック目録 (31)

このリストの書籍を御希望の方は、同封の振替用紙の通信欄でお申込み下さい。書籍代は送料共にお振込み下さいませようお願い致します。  
ご注文の本の定価の合計額に、右の表の送料を合せてお送り下さい。なお、お電話でのご注文も受け付けています。

1,000円以下の場合	300円
1,001円～3,000円の場合	400円
3,001円～5,000円の場合	500円
5,001円～10,000円の場合	600円
10,001円以上の場合	700円

### 家 族

(50音順)

『新しい家族の創造—「母親」と「婦人労働者」のはざままで』 布施晶子 青木書店

1984年 2678円(本体2600円)

家族社会学を専攻する著者の共働き家族の研究論。現代家族と共働き、新しい家族の創造と共働き。

『いまの家族 これからの家族』

生命保険文化センター編 日本放送出版協会

1985年 1133円(本体1100円)

学際的に家族のあらゆる問題にアプローチ。家族を考える手がかりになる。よくまとめられた好書。

『ウホッホ探検隊』 千刈あがた 福武書店

1984年 927円(本体900円) 文庫(371円 本体360円)

「離婚家族が暗いとは限らないテーマの、幼くやわらかな抵抗劇」の始まりの日、〈べつべつサイン〉(離婚という未知の探検隊)に署名押印した日、千刈あがたは語りはじめた。女たちに喫茶店やロビーでしゃべり散らされた言葉を、形にとどめた作品。息子の次郎がとてもいい「僕の背中に男を感じるでしょう」っていうのだから。

『おきざりにされた猫』

キャロル・アドラー

足沢良子訳 金の星社 1985年 1009円(本体980円)

親の都合で一方的に母子の絆を切られた13歳の少年が、里親から里親へと不安な環境の中で夏の避暑地に置き去りにされた猫との交流を通して、自分の置かれている立場と生き方を学びとっていく姿を描く。

『男が変わる—スウェーデン男女平等の現実』

ヤンソン由実子 有斐閣選書

1987年 1442円(本体1400円)

スウェーデンは最も男女平等の進んだ国、女性解放の実現された国といわれている。スウェーデンに詳しい著者が、①どんな制度があるか、②どのように男女平等をおしすすめているのか、③実態はどうか、3点を中心に仕事と家庭の両立を実現しようとするスウェーデンの男女を描く。特に「男がどう変わったか」、スウェーデンの男性側にも焦点があてられている。なかなか性別役割が崩れそうもない日本の状況を再検討するうえにも格好の書であり、最新情報である。

『解体家族 改訂版』

小室加代子 批評社

1989年1月 1648円(本体1600円)

日本版「クレーマー・クレーマー」。父子家庭と母子家庭、脱家族化に人々はどう生きるか。

『家族?—100人の普通の人々による普通の人のための人生相談』

スタジオ・アヌー編 晶文社

1986年 2884円(本体2800円)

大きな話題を呼んだ「子供!」につづく女性スタッフ・スタジオ・アヌーがつくったインタビュー集の第2弾。100人の男女が語る日本の家族像は多彩で面白い。既成のイメージにとらわれないさまざまな声ののっている。

『家族・第三の転換期』

袖井孝子 亜紀書房

1985年7月 1545円(本体1500円)

戦後日本の家族は、家制度の廃止と高度経済成長によって二度の転換期を迎えた。そして、いま家族は第三の転換期—高齢化社会の到来を迎える。家族の再編成を余儀なくされている今日の日本の家族問題が女性の自立と高齢化社会を中心にわかりやすく述べられている。これからの女性・家族のあり方を示唆する内容。

## 『家族再考—新しい生き方の発見』 村松基之亮

ミネルヴァ書房 1986年 1236円(本体1200円)

新しい時代の新しい家族の生き方とは、目新しい進歩的な手法を次々に採用することではなく“プロセス”というものを省略しない、地味で素朴で月並みなやり方でその家なりの文化を創造していくこと、小さな平凡なことを少しずつ積み上げていくことであるという。

## 『家族社会学の基本問題』 飯田哲也 ミネルヴァ書房

1985年 2884円(本体2800円)

史的唯物論を糸口に家族社会学の理論構築の方向を追究。資本主義社会と家族、家族問題の基本理論、主婦問題と配偶者選択、主婦論争にも触れている。

## 『家族新時代—夫たちの場所』 毎日新聞社社会部編

毎日新聞社 1985年 1133円(本体1100円)

新聞の家庭面から社会面へ家族問題が飛び出した好連戦の出版。夫たちの苦悩は経済中心の管理社会のあり方への問題提起なのだが、はたして大きなうねりとなるか？夫たちの本音がもっと聞こえてくるといいのだが……。

## 『家族生活とストレス』 石原邦雄 堀内出版

1985年 2884円(本体2800円)

家族は一面でストレスの発生源であるが他方、生活主体としてストレス刺激を受けとめ、これに対処していけるシステムであることに力点をのいた家族ストレス論を展開。

## 『〈家族〉って何だろう』 ますのきよし 現代書館

1981年 1545円(本体1500円)

「男も女も育児時間を！」と主張する男性側からの子育て論の草分け。

## 『家族という関係』 金城清子 岩波書店(新書)

1985年 443円(本体430円)

現代の家族問題を主として女性の視点から考える。家族の変換を跡づけながらいま社会変化の中での家族のあり方を法制度を中心に考える。著者は「法女性学」の著者。

## 『家族とは何か』松原治郎監修 井崎均編著 勁草書房

1986年 2163円(本体2100円)

アメリカで50年もかかった核家族が日本ではわずか10年ではば達成した核家族化のおかげで、ようやくかちえた家族の個としての核家族化がことあるごとに悪くいわれる今日、家族本来の機能としての核家族の復権を説く。個としての原点に立った家族観を身近な日常的側面を手がかりに考える。母子心中、ニューファミリー、お墓参り、結婚式あれこれ等。

## 『家族と福祉の未来』 山根常男編著

全国社会福祉協議会 1987年 2060円(本体2000円)

家族社会学の最新の論文集。日本における家族の動向(野々山久也)、結婚と性(善積京子)、世界の結婚と家族(アメリカ、イタリア、スウェーデン)他。

## 『家族の時代—ヨーロッパと日本』 木村尚三郎

新潮社(選書) 1985年 803円(本体780円)

天下国家を論じるダイナミックな大議論は影をひそめ、代って家族の新たな結び合い、夫婦のあり方、親子のあり方の小議論がさかんになってきた。国民国家の時代から家族の時代へと時代は大きく折れ曲がりつつある。家族の問題をヨーロッパの歴史を通して考えた家族の社会史。

## 『家族の肖像』 森 瑠子 集英社

1985年 906円(本体880円)文庫(330円 本体320円)国際結婚の問題、老人問題、子供の問題などがからみあい、近代的家族像を理想とするイギリス人の夫と作家という仕事をもつ「氷づけの憂鬱」に悩む妻を描いている。離婚寸前の夫婦関係、いまだ十分に解放されていない女性の性意識などがテーマである。また、孤老をしっかりと生きているイギリス老人の姿に胸が痛む。

## 『家族の文化誌—さまざまなカタチと変化』原ひろ子編

弘文堂 1986年 2060円(本体2000円)

地球上の諸社会における家族の多様な文化差を各文化圏ごとに紹介(ヘヤーインディアン、マレー農民、東ベンガルのイスラム、ネパール、サモア、現代ドイツ、アメリカ、韓国、沖縄、日本など各地におよぶ)。編者の原ひろ子氏は地球上の人口の大部分が「子を産まぬ」と宣言しないかぎり、人間の家族は消滅しないし「家族の実験」も行われつつけるだろうという。

## 『家族のミトロジー』 桜井哲夫 新曜社

1986年 1648円(本体1600円)

ミトロジー(神話学)の言葉が表しているように「たかだか200年ほどの歴史しか持たない」家族イデオロギーの神話を多方面から分析した読みごたえのある家族論。アリエスの「子供の誕生」を引用しながら〈母〉も〈子供〉も18世紀が生みだした概念であるという著者の論点はフェミニズムの家族論と通じるところが多い。特に日本の〈父〉は排除されてきたこと、日本の〈近代〉の果ての男たちの徒労感を論じた論文などは男性論としても興味深い。

## 『家族の歴史人類学』 マルチース・セガレーヌ

片岡、国領他訳 新評論

1987年 4944円(本体4800円)

親族の様相、家内集団の形成、家族の役割と感情、家族と社会など古くて新しい、われわれの関心事を追究した力作。

## 『家族の現在』 芹沢俊介 清水真砂子他 大和書房

1986年 1545円(本体1500円)

家族の戦後史、子どもの本に描かれた家族。特に小浜逸郎の家族論が興味深い。女性の解放と幸福のちがいをのべている。人間は社会的に解放されていてもエロスの不幸であるとのべ、江原由美子著「女性解放という思想」を評価している。育児・家事のとらえ方のちがはぐさと語りにくさをのべている。連続講演会の大まかな家族論ではあるが、刺激的である。

## 『家庭科新時代—Weからの提案』 半田たつ子編

ウイ書房 1987年 2060円(本体2000円)

日常生活の力を育てる家庭科。家庭科ってこんなに奥の深い教科だったのかと、いかにこれまでの家庭科は閉塞状態であったかがわかる。「自立した男と女を」「人間らしい生活」「差別のない社会」を3つの柱にした We からの提案。



『家庭のない家族の時代』 小比木啓吾 集英社文庫  
1986年 391円(本体380円)  
家族がいまホテル化している。思い込みで暮らす幻想家族、父親不在の擬似母子家庭、離婚と再婚がつくる新しい家族関係など、現代の家族の変容を精神科医が明かにする話題を呼んだ家族論。

『可能性としての家族』 小浜逸郎 大和書房  
1988年 1854円(本体1800円)  
「家族は解体すべきではないし、またそう簡単に解体するはずがない。家族はエロスのな共同体である」という著者の家族論。家族の根拠とは何か。家族についての不安の外的な指標とその正体は。

『ガラスの家族』 K・パターソン 岡本浜江訳 偕成社  
1984年 1236円(本体1200円)  
幼いときから里親のところで転々としてきた少女ギリ。貧しい生活の中でトロッターおばさんの愛情に接し生母への幻想を崩す。

『危機の家庭一女・性・政治』 吉武輝子 未来社  
1986年 1545円(本体1500円)  
著者の過去15年間の評論活動が一冊にまとめられた。「性」と真摯に向き合うごまかしのない著者の「女」に関する評論は圧巻。また「女性解放と反戦」に関する一文も迫力がある。一読をぜひおすすめしたい。

## おんなの本・中国

(連載第1回)

### 『中国婦女』

(中国婦女雑誌社)

秋山洋子



この欄でいままで紹介された西独やフランスとちがって、中国ではフェミニズムという思想の分野はまだ確立されていない。ここ数年、「婦学」という名で女性学が提唱されるようにはなったものの、まだ十分に市民権を得たとはいえないし、その文献目録の筆頭にかかげられるのはエンゲルスの『家族・私有財産・国家の起源』とベーベルの『婦人論』というのが現在の段階である。

そんな中国の中で、女の問題を最も広く深く扱っている出版物といえば、まず月刊誌『中国婦女』をあげなければならない。

『中国婦女』は中華全国婦人連合会が発行している。いわば、国家のお墨付き婦人団体の機関誌であり、以前はそれこそ公式的な労働英雄の称賛や革命前の女たちの悲惨な生活といった記事で埋まっていた。

ところが最近では外見も中味も、驚くほどの変貌ぶりだ。B5版48ページ、ザラ紙の真中を金具で止めた作りの簡素な体裁は相変わらずだが、表紙に登場する女たちはミニスカートやレオタードと西側社会とほとんど変わらない姿になり、裏表紙には家電製品や化粧品品の広告が載るようになった。(写真 参照)

それよりもっと大きな変化は、扱われている記事のテーマや内容が、うわべだけの公式主義的なものから、中国の女たちの置かれている現実をしっかりと見つめ、問題を提起する内容に変わってきたことだ。

扱うジャンルは、ルポルタージュ、論文、調査報告、小説から医学や法律の実用知識、ファッション、教育まで盛りだくさん。外国に対する関心の高まりを反映して、台湾や香港を含む外国の女性の生活紹介も毎号なにかの形で載っている。最後のページは求婚情報欄で、毎号約40件が紹介される。

ルポルタージュでは、農村から都市へ流入してくる若い女性労働者が都市に居住権を持つ正規の労働者と

差別されている状況を鋭く追及したものや、国の人口抑止政策の裏をかいて移住しながら出産する家族の実態をユーモラスに描いたものなど、従来なら中国の恥部として隠されていただろう問題が大胆率直に取りあげられている。

読者からの手紙に編集部が答えたり、読者同士が誌上で論争をたたかわせたりといった誌面を通じての交流もさかんに行なわれている。昨年は1年間かけて「1988—女性の出路」と題する誌上討論が展開された。この論争は、現在進む経済改革の中で、工場の中で女が余剰労働力として整理されたり、豊かになった農村で女が自発的に専業主婦にもどったりする現象がおきていることに端を発し、いまあらためて女の労働や男女平等の意味を問なおそうというものだった。

この論争では、効率の論理から女を切捨てようという論と女の側からの反発、あるいは家事と仕事の二重労働に「もう疲れた、休みたい」という女の側からの悲鳴や家事を妻に押しつけていた夫の反省など素直なナマの声もどンドン出され、混沌とした中に現代中国のかかえる問題がいろいろな角度から照らし出されて興味深いものだった。

この論争自体は白か黒かの決着をつける形では終らなかった。むしろ、この論争そのものが、従来の公式的な女性解放論を脱却して中国の女たちが直面する問題を率直に柔軟に見なおそうという『中国婦女』誌の姿勢を示していたといえるだろう。中国の女の問題をのぞく窓として、この雑誌は薄いながらも中味の濃い貴重な資料だ。

あきやま ようこ 中国現代文学  
著書『女たちのモスクワ』勁草書房  
共著『世界の女性史⑩中国II  
—革命の中の女性たち』評論社

『逆噴射家族の時代』 宮迫千鶴, 太田克男, 関井光男  
青弓社 1987年 1442円 (本体1400円)  
カウンター・カルチャーを生きてきた団塊世代に欠けているのは大人になる方法ではないだろうか、と宮迫。ニューファミリーの底にあるおぞましき、日本的なモダン儒教の解体が先だ、恍惚防止のための男性解放、母親という名のスポイル装置など刺激的な話題がゾクゾク登場する座談会。

『講座 家族心理 全6巻』 金子書房  
1988年 各3605円 (本体3500円)

- ① 変貌する家族—その現実と未来  
家族をめぐる社会、歴史的諸態の検討
- ② 夫と妻—その親密化と破壊  
離婚、セックス、セラピー
- ③ 親と子その発達と病理  
登校拒否、家庭内暴力
- ④ 家族と社会  
共働き、単身赴任
- ⑤ 生と死と家族
- ⑥ 家族心理学の理論と実際

『個人化する家族』 日黒依子 勁草書房  
1987年 1854円 (本体1800円)

家族的生活を営むか否かは個人にとって一つの選択であり、それを選ぶにしても、人生のどの時期に経験するかについては個人が選択する。家族役割が女性の人生を規定する「拘束要因」としての家族から個人が選択する生き方を助ける「支援要因」としての家族に変化している。家族社会学をフェミニストの視点から捉えた現代の家族論。主婦役割の社会学、個人化する家族、女性解放と家族他。

『近代家族の形成』 エドワード・ショーター  
田中俊宏, 岩橋誠一他訳 昭和堂  
3914円 (本体3800円)

今日の家族における男女間の愛情や母親の子どもに対する愛情といった心情が、伝統社会からの普遍的なものではなく、資本主義や個人主義の発達した「近代による産物」であることを論証した話題の書の翻訳。近未来家族を思わせる「やすらぎの場としての家族の消滅」の傾向を予測し、経済的自立とセックスの重視の1970年代を分析(1977年刊)。家族史、家族論のテキストとして興味深い。

『結婚そして夫婦・家族—新しい女と男の関係を創る』  
尼川洋子 汐文社 1987年 1339円 (本体1300円)  
“ああ、私は一人の人間でありたい”という心の叫びを大切に、神戸で女性グループ『それいゆ』(22号・ミニコミの女たちに登場)を主宰する著者が書き下した団塊世代からの発言。真摯にいきるひとりの女性の息づかいの伝わる好著。“夫や家族の絆”を“女と男の関係”を語る自分史的家族論。“友だち結婚”の多かった団塊世代にぜひ読んでほしい一冊。

『結婚よりもいい関係—非婚の家族論』 坂元良江  
人文書院 1988年 1236円 (本体1200円)  
TVのプロデューサーの著者が家族・パートナー・フェミニズムを語る。「夫は家に専有の家事労働者を持って独身や共働きの人よりもずいぶん楽をしているわけだ。私には、まるで国家が結婚しない人間やいつまでも家庭に入らない女は犯罪だと言ってペナルティを課しているようにすら思える」(「他人の妻の面倒なんて見られないや」より)家族は生き物、変わって行く、いまをいきる女性の〈結婚しない家族論〉。

『幻想する家族』 桜井陽子, 桜井厚 弘文堂  
1987年 1339円 (本体1300円)

『ポスト・ファミリー』の桜井陽子が夫とともに書いた企業と家族問題をからめた、いまの日本型家族の問題点を鮮やかに分析・問題提起する家族論。男女ともに性別分業の解体を日常的に実践することが家族も夫も企業社会からの解放につながると結論する。

『子育てホントの話』 小室加代子 批評社  
1989年2月 1854円 (本体1800円)

小室加代子の子育て対談集。お相手は吉武輝子、俵萌子、加藤登紀子、谷川俊太郎、渥美雅子、安藤和津他。再婚同士の子育て、離婚家庭の子育て、共働きの子育て、男の子にも家事を他。

『自然な関係』 吉田真由美, 山本コウタロー  
教育史料出版会 1984年 1339円 (本体1300円)  
今、話題のカップルが男女の自然な関係を語る。ニューファミリーに人気のカップルの本。

『樹下の家族』 干刈あがた 福武書店  
1982年 1236円 (本体1200円)

愛がこわれようとしている。好きで結婚した女と男がすれちがいはじめた。家庭内の「エロスの喪失」がみじめだ。南国からやってきた青年に昔の風を感じてしまう。妙にせつない。「愛からの転向」はつらい。家族の崩壊寸前を描いた干刈あがたのデビュー作。

『自立家族—一個の時代のライフ・イメージ』 四方洋渡  
渡辺まゆみ 有斐閣選書 1988年 618円 (本体600円)  
「自立家族」とはこれからの家族のあり方を差し示す願いのこもったキーワード。家族最前線(シングル、ペーパー離婚、単親ファミリー等)を取材し、これからの家族のあり方を考える。

『新・家族の時代』 菅原真理子 中公新書  
1987年 556円 (本体540円)

時代の変化は家族・女房と子どもから。男性は全く鈍感。変貌しつつある家族を多角的にとらえた好著。

『水 獣』 富岡多恵子 新潮社  
1985年 979円 (本体950円)

ヒトの欲望を上手に美しく整えているはずの結婚制度を鋭い視点で捉えた問題作。「家庭内強姦」の部分と「性の労働」の部分のスリリングに描いてみせる。「マンヘイティングをディスプレイしている」とも評される作品。富岡氏の結婚制度に対するニヒリズムは次作の実験作品『白光』へと移っていく。



## 『育てあい家族』

黒岩秩子 径書房

1987年 1442円(本体1400円)

一組の双子を含む7人の子どもを育てながら保母をしている著者の子育てと家族論。『おお子育て』(教育史料出版会)につづく内容豊かな本。子を持って知る「子の恩」、子どもとの交換ノート、医師の夫との交換ノート、そして性別役割に固定されないのびやかな関係が築かれている様子がよくわかる。就学時健康診断批判、ニールの教育論の実践「サマーヒル」訪問記など。

## 『正しい母子家庭のやり方』

久田 恵, 酒井和子

JICC 出版局 1985年 1030円(本体1000円)

“母子家庭”であることを最大限に生かすことが母子家庭を正しくやる秘訣なのだという手引き書。いま、いきいきと“母子家庭”をやっている女たちの知恵を公開。みんなこの金額で暮らしている、母子家庭はひとつの生活のスタイルである、母子家庭には母子家庭の子育てがあるなど、勇気の出る本。

## 『単親家庭の呪い—亭主おらずとも子は笑う』

下田治美

情報センター出版局 1987年 906円(本体880円)

「私は好きで子供を生んで、好きで育てているのだ。子供に感謝されるいわれはない」と子育ては自分主義で。しかし、単親家庭の親はいつも慢性過労。妊娠中に別居して離婚。今日まで、ひとり息子のりゅうと2人の家族をつづけてきた。小気味よい会話とユーモアで親子のホンネを語るのしい本。

## 『妻業・夫業』

近藤 裕 社会思想社

1987年 1545円(本体1500円)

量より質の夫婦関係のあり方を考え、愛情のきずなによる夫婦のコミュニケーションの大切さを語る。

## 『妻たちの企業戦争』

木下律子

社会思想社(現代教養文庫)

1988年 494円(本体480円)

第30号 8頁をご参照下さい。

## 『2 DK の呪い—ニッポンの家庭のタブーに歯向かう』

下田治美 情報センター出版局

1988年 906円(本体880円)

前作の『単親家庭の呪い』で母子家庭の痛快なエッセイを書いた著者が2DKの団地生活や子どもを題材にしたこれまた痛快なエッセイ。

## 『日本人の家庭観』

総理府広報室編 大蔵省出版局

1987年 412円(本体400円)

家族と家庭に対する国民の意識調査を1986年3月に全国の20歳以上の3000人を対象に世論調査を行った。その結果報告がこの冊子にまとめられている。

## 『ハイブリッドな子供たち—脱近代の家族論』

宮迫千鶴

河出書房新社 1987年 1545円(本体1500円)

『ママハハ物語』につづく家族論。よみごたえのある好著。「この一文は両親の離婚ということによって近代の(結婚制度)が崩壊してしまったのを目撃した私が、愚行を再演したくないという気持ちで生きてきたはてに、こういう新しいシナリオなら、結婚してもよいと思えるものを書いた」(宮迫)。特に第3章さわやかな結婚関係(ツイン・カルチャー)のために—は若い世代へのラブメッセージであり、第2章曲り角に来た日本の親子—は親世代へのセラピーの書である。

## 『バイリンガル・ファミリー—国際結婚の妻たち』

大沢周子 筑摩書房 1989年2月 1442円(本体1400円)

「自分たちは日本の企業の中で働いていても外国人としての扱いか受けない。外国人として生きるしかない」「日本から大勢の父親が世界中へ出ていってモノを売った。しかし帰国生たちは学級のみならず同じでなかったために、日本の教室からはじき出された」。本書は国際化といわれながら単一民族社会の幻想をつき崩せないわが国の国際問題を国際結婚の妻たちを取材し、異なるものがともに生きる道を探る。

## 『白光』

福岡多恵子 新潮社

1988年 1133円(本体1100円)

「性」と「家族」をテーマにフェミニズムの最前線ともいえる作品。“血のつながらない家族の建設”“性欲から解放された関係のやすらぎ”。家族あるいは「合宿」みたいなタマキ・ハウスに集まる女と男。

## 『母親の就業と家庭生活の変動』

原ひろ子編 弘文堂

1987年 14214円(本体13800円)

新しい父母像創造のための総合的調査研究。文化人類学、社会学、経済学、心理学、医学の専門家が行った1500名の子どもと父母の面接調査の結果報告。母親の就業にとまらぬ諸問題を考察。

## 『半満月など空にかかって』

三枝和子 福武書店

1985年 1442円(本体1400円)

「わたし、誰の子供でもない子供を産みたかったんだから」「それは濡子さんの、子供が産まれるまでのロマンです。子供を産んだり、流産したり、酒を飲んだり、男と寝たり、あと、どれだけ生きるのだらう。東京・荻窪のスナック「くれない」に出入りする女と男の関係を描きながら、産む女性の性を語る連作小説。

## 『伴侶に先立たれた時』

A・デーケン 重兼芳子編

春秋社 1988年 1339円(本体1300円)

「配偶者の死」は老年期のとりわけ老年期の女性の問題である。80%以上の女性たちがいずれ配偶者の死を経験する。また死別以上に夫婦仲のよかった人々のその打撃は当然のことながら大きい。老年学、精神医学、社会心理学、哲学の立場から、また経験者の立場から死別のときにそなえる生と死を考えるセミナー特集。

## 『一人家族』 増田みづ子 中央公論社

1987年 1236円(本体1200円)

不幸な少女時代を過ごしたため「家庭」への思い入れが激しすぎて、結局は壊してしまう友人の姿から、崩れる心配のないシングルライフを自認していきる表題作『一人家族』「ずっと一人を続けるのもしんどいが、二度と一人になれないのもつらい」と考える主人公が結婚を決意。余りにも爽やかな継母と継子の関係に、改めて生母なるものを考えさせられる『未婚の継母』他5篇。

## 『夫婦別姓時代』 星野澄子 青木書店

1987年 1545円(本体1500円)

夫婦別姓選択制を求める声には、新しい男女(夫婦)の関係のあり方を築こうとする人々の願いがこめられている。日常性の中の姓の問題、法制度の中の氏名、そして結婚による改姓の諸問題を明かにする。また、日本の戸籍制度、入籍、世帯主なども言及されている夫婦別姓問題を考えるための基礎資料として有効な本。フェミニズム総論時代から各論時代へと個別に風穴を開ける時代の到来を象徴する本である。

## 『夫婦別姓時代を生きる—現代のエスプリ261』

福沢恵子編集 至文堂

1989年4月 1020円(本体990円)

最新刊案内9頁及び書評欄をご参照下さい。

## 『父子家庭』

平野隆之、岡 知史、町野 宏、赤阪由起夫

ミネルヴァ書房 1987年 2266円(本体2200円)

「母子家庭」に対して、当然「父子家庭」もある。本書は孤立する父子家庭の当事者の組織(大阪府枚方市父子福祉会)の活動と父子家庭にかかわりをもった二人の若手研究者が一緒になって、全国の父子家庭の組織化に役立つことを願い報告書として本書を出版。「父子家庭」に焦点をあてた貴重な一冊。

## 『父子家庭を生きる—男と親の間』 春日キヌヨ

勁草書房 1989年1月 1751円(本体1700円)

第30号9頁をご参照下さい。

## 『崩壊告知』 三枝和子 新潮社

1985年 1236円(本体1200円)

「これから家庭を形成する若い人々に多く読まれるべき作品」だと評されるように家族、血縁、父とは何かを問う本。三枝和子は「自分では責任をとらないくせに、権利は失いたくない」父親権を巧みに描く。もし、他の男が父親になって女との子どもを育てるといいたしたらどうなるのか。結婚制度のからくりを皮肉っぽく語ってみせる。

## 『ポストファミリー(その他の関係)』 桜井陽子

ニック舎 1987年 1339円(本体1300円)

「性差役割分業の撤廃」という大命題を家庭内で実践し、親子三代がそれぞれ自立していく姿が明るく語られた面白い本。「父親の子連れ赴任と母親(著者)の単身居残りという私たちの選択は世間の目にはよほどおかしいものに映ったようだ」という。家族とは、夫婦とは、こうあるべしという窮屈な枠にとらわれずに実践あるのみ。家事労働に関しても夫は手強いじゃダメ、主体的にかかわる家事を伝授して自立させ、おまけに制度としての結婚に疑問を持ち、いわゆるペーパー離婚をやって法的には夫婦じゃない(その他の関係)になっちゃった。

## 『ホームエコノミックと女性』 大久保克子、善積京子他

昭和堂 1987年3月 2472円(本体2400円)

本書は世界レベルのホームエコノミックスの視点から家政学を捉え、女性だけの領域ではないことを明確にしている。結婚・家族論・家事行動論など従来の家政学の本とは趣の異なる新しい視点の論文が多い。

## 『本音で生きよう!ハウスワイフ』 杉原登喜子

松香堂書店 1984年 1339円(本体1300円)

社会通念・習慣・家制度に対し、鋭い視点をもつ痛快エッセイ。意識変革のできていない男性にも読ませたい本。終章は著者の女性学的自分史。

## 『ママハハ物語』

宮迫千鶴 思潮社

1987年 1442円(本体1400円)

久しぶりに建設的な家庭論に出合った。著者自身が離婚・再婚家庭に育ち、そして近代的結婚に失敗した子連れ(高校生のQ太郎君)男性との新・再婚的「同居」家族をはじめ、ママハハとなった体験的家庭論。血縁幻想に抑圧されることのない再婚家庭のつくり方を手ほどきする好エッセイ。

## 『向いあう夫と妻—コミュニケーションを見直す』

佐藤悦子 創元社 1987年 1236円(本体1200円)

家族療法家が危機にある夫妻をとりあげ、よりよいコミュニケーションの在り方を検討。わかり合い、けんか上手に、コミュニケーションとしての性等。

## 『離婚の社会学—アメリカ家族の研究を軸として』

野々山久也 日本評論社 1985年 2678円(本体2600円)  
アメリカの離婚問題の章で著者は「アメリカの経済発展は女性たちを労働市場に引き出すことによって女性たちの自己扶養能力を高めていくとともに、結婚を生活していくための手段と見なすのではなく、むしろ結婚における夫婦の情緒や友愛が最も重要な要素になってきた」と述べている。離婚に関する家族社会学の理論、再婚率と再婚家族の研究の動向、アメリカの同棲問題。

## 『ワードマップ 家族』

金井淑子編 新曜社

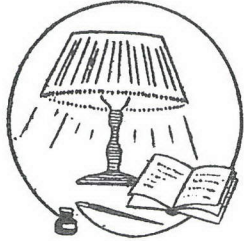
1988年 1339円(本体1300円)

人類学、歴史社会学、フェミニズム、現代思想の4領域の家族に関する34のキーワードで解説する「家族のメタファー」。このワードマップを読みすすむと家族の機能の社会化と男女役割分業の相互乗り入れなど家族像の変容がよくわかる。「近代家族幻想」と「変わりゆく家族像」がコンパクトなこの一冊にうまくまとめられている。家族論のテキストとしてもいい。



—女性のための—

## 最新刊案内



—1989年2月～  
1989年4月及び  
第30号未掲載分—

〔性・からだ・心理〕

## 『性の儀礼—近世イギリスの産の風景』

アングス・マクラレン 荻野美穂訳 人文書院  
1989年2月 2472円(本体2400円)

近代初期のイギリスの男女は快楽と出産を結びつけることによって、高い出生率を誇っていた。子どもが高く評価され、多産の処方箋が種々あった。また逆に避妊の戦略もあった。19世紀の劇的な出生率低下と墮胎禁止法など生殖の歴史を考察。興味深い性の歴史学である。訳者あとがきと参考文献が有効である。

## 『性ってなんだろう』

池上千寿子 大修館

1989年4月 1030円(本体1000円)

40歳を迎えてようやく自分の言葉で“性ってなんだろう”と語りかけられるような気がする著者。性は個性そのもの。好奇心だけでセックスしてはだめよ。自分の性を自立させよう。

## 『女の子のからだ』北沢杏子著 今井弓子絵 岩崎書店

1989年3月 1009円(本体980円)

中学・高校生むきのからだシリーズ。自分の性器をみてみよう。ちつの構造を知ろうなど、女の子のからだのしくみについてわかりやすくガイド。

## 『感染—エイズ!!感染した医師とその妻の記録』

G・ヨンソン, B・ヨンソン

ビヤネル多美子, 多勢真理訳 学陽書房

1989年5月 1236円(本体1200円)

輸血感染した医師とその妻はどう対処したか? いたずらにエイズを恐れ、血友病患者や感染者を差別し、エイズに対する理解と情報にとぼしい日本の現状に警鐘を鳴らすタイムリーな好著。

〔女性史・評伝〕

## 『アメリカ黒人女性解放史』

ポーラ・ギティンクス  
河地和子訳 時事通信社

1989年2月 2884円(本体2800円)

「初めての本格的なアメリカ黒人女性史」と評される黒人女性史。性差別と人種差別との二重の闘いをどうのりこえたか? 奴隷時代は「情婦、売春婦、子産み器」として貶しめられ、トニ・モリソンがいうように「黒人の女たちは寄りかかるものは何もない」中からブラック・フェミニズム運動を展開。タブーであった黒人社会にもメスを入れる。年表、ブックリストなどを付記。「私の出会った本」(13頁)をご参照下さい。

『エロチックな反乱—フランシスカ・ツー・レーヴェントローの生涯』 ヘルムート・フリッツ 香川 檀訳  
筑摩書房 1989年1月 1854円(本体1800円)

「翔んでる女伯爵」として一世を風靡したプロイセン生まれのレーヴェントローの評伝。生家の伯爵家と結びだしたのち、作家、女優、非婚の母など自由奔放なボヘミアンであった。当時の女性リーダーたちが職業的自立を訴えていた時代に彼女は貴族の特権思想の持ち主であり、「婦人運動が女を男性化しようとする限り、あらゆるエロス文化にとって紛れもない敵である」ともいっていた。

## 『肉体の文化史—体構造と宿命』

スティーヴン・カーン

喜多迅鷹, 喜多元子訳 法政大学出版社

1989年2月 2472円(本体2400円)

19世紀半ばから欧米人たちはそれまで彼らを支配してきた厳しい性道徳に対して反ばつをはじめた。それは芸術面、文学、社会科学においても精神と肉体の相互作用を強調するようになる。本書は肉体的快楽をより、自由に追究しようとした米国の歴史学者の著書(1975)。

## 『結婚・受胎・労働—イギリスの女性史 1500～1800』

メアリ・ブライア編著 三好洋子編訳 刀水書房

1989年1月 2575円(本体2500円)

16世紀から18世紀に至るイギリス女性史。工業化前のイギリスにおいて妊娠可能な妻たちは妊娠か授乳かの選択に立たされ多産がつづいた。その後授乳法の変化から出生率に変化が生じる。その他寡婦の再婚、女性の都市経済、この時期に出版された女性の著作について。

## 『婦人・女性・おんな—女性史の問い』

鹿野政直

岩波新書 1989年2月 494円(本体480円)

ここ10年来女性史と向かいあってきた男性歴史学者が、女性の手になる著書を中心に女性史と女性論の課題をとらえ直す。女性学、民族学がいま女性史に問題提起するものは?

## 『私たちの戦後史—大阪からのレポート』

柴田悦子編

創元社 1989年4月 1300円(本体1262円)

大阪婦人問題研究会のメンバーが戦後大阪の婦人運動のあゆみを発表。紡績女工、市バス車掌、母親運動、消費者運動、国連婦人の10年、均等法、平和運動などこの本にとりてい納まりきらない女性たちの体験を記録した貴重な戦後史。

## 『雪華の刻をきざむ—新潟近代の女たち』

新潟女性史クラブ ユック舎

1989年3月 1545円(本体1500円)

このところ地方女性史がついて出版されている。神奈川県『夜明けの軌跡』がその先がけとなったようだ。すでに『籠のうた』(1981年)を上梓しているこのグループが新潟近代女性群像をとり上げた。結婚・自立・家制度をテーマに1885年生まれから1928年生まれの女性まで11人の女性の軌跡を追う。婦人参政権運動、西洋産姿、無産運動他。

## 『菅野スガと石上露子』

大谷 渡 東方出版

1989年4月 1900円(本体1845円)

上記の二人は明治10年代に大阪に生まれた。スガは21歳で女性記者として社会に登場し、露子は大地主の相続人の立場にありながら社会主義に共鳴。女性革命家と反戦歌人として明治を生きた二人の実像をとらえる。

『シュルレクチュアリティーシュルレアリスムと女たち  
1924-47』  
ホイットニー・チャドウィック  
伊藤俊治+長谷川裕子 PARCO 出版  
1989年3月 2884円(本体2800円)  
20世紀美術の流れの中に「女性」をとらえる美術史研究  
家がシュルレアリスム運動において女性アーティストが  
はたした役割をまとめた。図版220点が収録されている。

### 〔女性論・フェミニズム〕

『言挙げする女たち』 円谷真護 社会評論社  
1989年3月 1751円(本体1700円)  
近代女性の思想と文学。岸田俊子から丸岡秀子、清水紫  
琴から芝木好子まで女性の文筆活動の足跡を追う。

『アンチ「クロワッサン症候群」』 わいふ編集部編  
社会思想社 1989年3月 977円(本体950円)  
雑誌「クロワッサン」にあおられて結婚しない女が増え  
たという「クロワッサン症候群」の事実誤認に挑戦。あ  
のひとりよがりの『クロワッサン症候群』を鋭く斬っ  
ていて興味深い。さすがに「わいふ」のメンバーの日頃の  
成果がこの本にあらわれている。

『女性解放の構図と展開—自分史からの探求』  
一番ヶ瀬康子 ドメス出版  
1989年1月 7004円(本体6800円)  
女子教育及び福祉の問題に長年かかわってきた著者の論  
文集。終章 女性解放への研究視点—自分史からの検  
討の中に著者の戦後体験及び研究者としての姿勢が書か  
れている。序章 女性差別と人権問題の構造は読んでお  
きたい論文である。

### 〔家族・パートナーシップ〕

『男と女 変わる力学—家庭・企業・社会』鹿嶋 敬  
岩波新書 1989年4月 490円(本体476円)  
「共働き」「均等法」「価値観の多様化」の三つのキーワ  
ードを手がかりに職場や家庭での男女間の「力学」がど  
のような状況にあり、両者はどう変化するかを日経新聞  
の婦人部記者の男性著者が検証する。特に変わる男女の  
関係性を力学としてとらえるところが面白い。「日経」  
らしい。突きつめれば男がどう変わるかの問題だと自分  
自身も共働きの著者はいう。男性側からの発言をていね  
いに読みたいものだ。Ⅰ男社会の憂うつ、Ⅱ夫たちの困  
惑、Ⅲ女たちの時代、Ⅳ女たちの憂うつ、Ⅴ何かが変わ  
る、Ⅵ男女共生時代に向けて。

『男たちへ』 塩野七生 文芸春秋  
1989年1月 1545円(本体1500円)  
「フツウの男をフツウでない男にするための54章」とい  
うサブタイトルがつけられている。この本を中年のサラ  
リーマンがよく買っていくという。最近の元気な女性た  
ちは塩野さんでなくてもこれぐらいの男性に対する審美  
眼はもちあわせていそうだ。「男性改造講座」の一つや  
二つぐらいのものにできそうだ。外国暮らしの著者からの辛  
口メッセージがはたして日本の男性に届くか。「インテ  
リ男はなぜセクシーでないか」あたりをどうぞ。

『パパはごきげんななめ』 伊藤比呂美、西 成彦  
作品社 1989年3月 1236円(本体1200円)  
『良いおっぱい悪いおっぱい』の伊藤比呂美さんが夫の  
西さんとコンビでたのしい育児書を出した。夫の西さん  
の妊娠出産と子育ての全てを父親として主体的にやって  
いるパパのエッセイ。妊娠出産編、育児基礎編、育児応  
用編、苦悩編。「家事育児をするとホメられるけれど、  
父親は育児のアマチュア、助手にすぎないという通念が  
あるからこそ、ほくたちはホメられる。じつはこれは差  
別されていると、ほくらは気がつくべきです」と西さん。

『主婦が動きはじめた』 東急エージェンシー  
女性ライフデザイナーズ・グループ編  
1989年3月 1030円(本体1000円)  
有職主婦と専業主婦218人のアンケート調査により主婦  
の主張と生き方を対比させ、現代の主婦の意識をさぐる。  
有職 vs 専業主婦それぞれの言い分、妻・母・女・社会の一  
員としての言い分。興味深かったのは夫の呼び方が有職  
と専業主婦ではちがいがでていることである。

『「家庭」という風景—社会心理史ノート』 井上忠司  
NHK ブックス558 1988年9月 772円(本体750円)  
家族の孤独化が進行し、家庭内の心理的な絆がゆらいで  
いる。本書は制度としてのイエ、間柄としての家族、装  
置としての家庭という三つの側面から日本人特有の社会心  
理を捉え直す。くつろぎの装置としての家庭は今後一層  
必要になっていくのではなからうか。

『離婚の研究—人々はどのようにして離婚するのか』  
A・アルヴァレス 高見安規子訳 晶文社  
1989年1月 2369円(本体2300円)  
『自殺の研究』で有名な著者が自らの離婚経験を問い直  
し、D.H. ロレンスなどの文学を通して離婚の社会史や  
歴史を考察。

『子育てホントの話』 小室加代子 批評社  
1989年2月 1854円(本体1800円)  
本号特集4頁に既出。

『「クレイマー、クレイマー」以後—別れたあとの共同  
子育て』 棚瀬一代 筑摩書房  
1989年2月 1236円(本体1200円)  
「離婚は夫婦の離縁であって、親子の離縁ではない」と  
いう考え方をするアメリカ的離婚以後の子育て事情をル  
ポ。「子どものためにやらなくてはならないことだから  
やる」という離婚カッパルは子どもへの「愛」が離婚相  
手に対する「敵対心」より強いという。この一点を核に  
「共同子育て」がいま拡がっているそうだが……。

『バイリンガル・ファミリー—国際結婚の妻たち』  
大沢周子 筑摩書房 1989年2月 1442円(本体1400円)  
本号特集目録5頁に既出。

『ニューシルバーの誕生—高齢化社会とシルバージネ  
ス』 菅原真理子 東洋経済新報社  
1989年3月 1700円(本体1650円)  
長寿は生活意識や人生設計を変えるだけでなく、日常の  
暮らしを変えている。子どもは大きくなり、家族は大人  
によって構成されるようになる。ストックがなくては高  
齢期は生きられない。団塊世代を中心とするニューシル  
バーはもう保護され扶養されるだけの存在ではない。



## 〔労働・経済・くらし〕

## 『女性ニューワーク論』

金森トシエ, 天野正子, 藤原房子, 久場嬉子 有斐閣  
1989年3月 1545円(本体1500円)

一人の人間としてトータルに生きたいと願う主婦たちの間に従来の職業(ジョブ), 事業(ビジネス)とはちがう「新しい仕事・働き方」(ニューワーク)が広がりはじめている。本書は神奈川県婦人総合センターが行った「新しい仕事づくりの可能性—女性の職業創出に関する調査研究」をベースに食・衣・家事・介護・育児・女性情報などの分野に“もうひとつの働き方”の実態と問題点をとり上げている。

## 『なぜ日本人は働きすぎるのか』

猪瀬直樹+信州大学客員講師団 平凡社  
1988年12月 1442円(本体1400円)

なぜ, 日本の労働時間は短縮できないのか。日本と西洋の双方の誤解, 働きすぎ日本の行方など今日的な問題を個性派集団が討論と分析する。

## 『助産婦の戦後』

大林道子 勁草書房  
1989年4月 2580円(本体2505円)

女の独占的であった助産が男の産科医に短期間にとって代わられた経過を研究。GHQの指導による施設分娩への方向性, これからの助産のあり方等。

## 『どらまちっくにカーペンター—女のワークショップR &amp; R』

川口洋子 梁 容子編著 ブレーンセンター  
1989年4月 1380円(本体1340円)

2人の女性の大工商売挑戦記。10年間頑張ってきた大阪の元気印の女二人。「女の仕事」の領域の壁を破って米国に大工留学した元メンバー・荻原みどりさんの体験記など。

## 『女たちの反原発』

三輪妙子編著 労働教育センター  
1989年3月 1339円(本体1300円)

反原発でたたかっている12人の女たちの報告・トーク, 講演録。福井, 島根, ネグロス他。

## 〔ルポ・エッセイ〕

## 『留置場・女たちの告発』

手塚千砂子 三一書房  
1989年2月 1648円(本体1600円)

日本の留置場で人権無視がまかり通っている。まず留置場を代用監獄とする悪制度の廃止, 裸体検査, 女性の人権と男性看守の問題など留置場体験者と弁護士が拘禁施設の問題を告発する緊急発言。

## 『ルポルタージュ 看護婦』

亀山美知子 有斐閣  
1989年5月 773円(本体750円)

全国12の病院で働く看護婦をルポ。著者は『近代日本看護史』で看護史を, 自身も看護婦であり教師。内側から看護婦の日常をレポート。

## 『東大卒の女性—ライフ・リポート』

東大女子卒業生の会 さつき会編 三省堂

1989年2月 1648円(本体1600円)

近年東大に入学する女性が増えたといっても88年の入学者はまだ全体の10%。ハーバード大学は40%の女子学生。40年前に東大が14名の女子学生を送り出して以来, 戦後の東大卒の女性は約5000人になった。本書は800人による調査からみた東大女性卒業生の仕事・結婚・家庭生活など。東大女子学生キャンパス小史, 東大卒女性の昨日, 今日, 明日(座談会)。

## 『本のなかの少女たち』

津島佑子 中央公論社

1989年1月 1236円(本体1200円)

「少女とつぶやいた途端にずれが生じはじめています。少くとも, 私は自分のことを, 一度も『少女』と考えたことはなかった」という著者が求めた少女像とは? いくつかの作品の中に著者の求める少女との出合いがあった。ロッセ, グレートヘン, 嵐が丘のキャサリン, 春琴, ポーシャ他。

## 『産 日本の名随筆77』

森崎和江編 作品社

1989年3月 1236円(本体1200円)

「産む」に関するエッセイを多分野から収録。あたらしいのちに(吉原幸子), モスクワ出産顛末記(秋山洋子), 女が子どもに出会う日(佐藤洋子), 男と出産(立松和平), ヒトがヒトを生む(富岡多恵子)他。

## 『女は天皇制社会を変える—11・23このままでいいの? 天皇の問題, 女たちの熟語ライブ』

「このままでいいの? 天皇の問題」女性の会編著

社会評論社 1989年4月 1030円(本体1000円)

日本の女たちが「昭和」の終わりに当たって起した緊急集会の記録, 及び反天皇制への声々。住井すゑ, 加納実紀代, 関千枝子他。

## 『ハーズ HERS—'80年代に女が考えたこと』

「ニューヨーク・タイムズ」のコラムから生まれた女だけのベスト・コラム集。大荷の性 自分だけの部屋 予備の寝室 男が欲しい等。筆者は「ミズ」の編集者や作家たち。

## 〔雑誌・資料〕

## 現代のエスプリ 261「夫婦別姓時代を生きる」

福沢恵子編集 至文堂

1989年4月 1020円(本体990円)

従来の夫婦・家族を見直し, 「個」の存在を認めようという「夫婦別姓」問題がいま浮上してきている。本書は夫婦別姓の基本知識を集めたタイムリーな企画。夫婦別姓の基本知識(井上治代, 佐藤文明, 田辺聖子他), 夫婦別姓の実際(関口礼子, 加藤富子他), 別姓夫婦と子ども, ブックリスト, 別姓関連運動グループ一覧表他多彩。本号書評欄(16頁)をご参照下さい。

## 現代のエスプリ 262「カップルズ」

南 博

佐藤悦子編集 至文堂

1989年5月 1020円(本体990円)

座談会 カップルであること カップルとセックス 新しいカップルの形態 家族カウンセリングからみた日本人カップル他。

## 季刊 フェミナ 創刊号

編集委員 大庭みな子, 瀬戸内寂聴, 田辺聖子  
学習研究社 1989年5月 税込980円

上記三人の女性作家が中心となり創刊された女性文芸誌。  
女性新人発掘のための「フェミナ賞」を発表。

文学界 5月号 文芸春秋 1989年4月 税込770円  
作家のフェティッシュについて(「春樹現象」「ばなな現象」とは何か) 一富岡多恵子 小倉千加子, 「トラッシュュー」山田詠美の長編。

## 新聞研究 No. 451「女性とジャーナリズム」

日本新聞協会 1989年2月 824円(本体800円)

概説・女性とジャーナリズム(小玉美意子), 女性記者の移り変わり(佐藤洋子), 私の記者生活から, 生身の言葉を語りたい——女性運動の取材体験から(松田博公)

『新版 大学へのもう一つの道—社会人入学・編入学のすべて』 安井みすず 創元社  
1989年2月 1339円(本体1300円)

最近, 社会人の中に再び勉強しようという意欲のある人々が多くなってきている。大学のコースも少しずつ多様化してきている。社会人入試, 大学通信, 大学の途中から入れる編入学, 聴講生, 研究生, 公開講座他。

『資料 国際婦人年(2) ナイロビ戦略と女性の未来』  
国際婦人年大阪の会編 創元社  
1987年3月 1442円(本体1400円)

1985年ナイロビ世界婦人会議で採択された「婦人の地位向上のためのナイロビ将来戦略」「西暦2000年に向けての新国内行動計画」を収録。また「日本の女性はどこまで来たか—政府報告と私たちの現状」。本書を女性に関する基本的資料として活用したものだ。

## 月刊 女性情報(月刊 女性を改名)

バド・ウイメンズオフィス 各2060円(本体2000円)

2月号 女性史 1926-89年

3月号 揺れる教育の現場 現代主婦像

4月号 結婚・離婚をめぐるライフスタイル  
女性トップ・管理職

## 〔品切れ・絶版のお知らせ〕

『性・妻たちのメッセージ』わいふ 径書房

『アメリカ女性作家の深層』渡辺和子 ミネルヴァ書房

『ハイトリポート①②』 西武タイム

『大正女性史(上)』村上信彦 理論社

『女性労働の新時代』 東大出版会

『各国女性事情』樋口恵子編著 学陽書房

## 〔価格改訂〕

『女性と天皇制』 加納実紀代 1700円→2060円

## 〔文庫になった本〕

『超少女へ』 宮迫千鶴 集英社 432円

『新・階層消費の時代』 小沢雅子 朝日文庫 453円

## ＝ 松香堂書店から ＝

## 消費税についてお願い

書店組合では, 再版制度の維持と, 書店間での価格の相違を避けるために, 新消費税分を消費者に転嫁させて頂くことに決定致しました。松香堂もこの決定に従わざるを得ないので, 今号からやむなく, ミニコミを除いて書籍に消費税をプラスした表示になっています。どうかご理解下さいまして, 当面お申込みの際, 新価格でお振込み頂きますようお願い致します。

私ども小規模書店は, 大取次店とお客様の間でとても辛い立場におかれています。あまりに煩雑で分かりにくく, 結局は低所得層ほど負担の大きいこの消費税に対して, 書店組合でも怒りの声をあげ, 業界一致して廃止までねばり強く運動を展開してゆくことになりました。署名運動にも各地の書店でとり組みますので, どうかご協力頂きますようお願い致します。

## 『からだ・私たち自身』を重版します!

昨秋, 松香堂から出版した『からだ・私たち自身』はおかげさまで大変好評で, 売れゆきも順調です。全国の読者から感動の声や実際に役立てて頂いた例などが寄せられています。プレゼントカードも用意しています。結婚祝, 誕生日, 成人式などのプレゼントに最適です。お友達にもどうぞすすめてください。6月中には重版する予定です。

## 松香堂から有限会社フェミニネット企画が生まれました

松香堂は女たちの出会いの場・交流の場でありたいとねがってききました。この場がフェミニストネットワークの拠点となり, 女性のお役に立てる様になったことをたいへん嬉しく思っています。そして今, こんなネットワークを捻らせ, 女たちの才能を活かし, 女たちのこころざしを仕事にしてゆくために, 会社を設立致しました。フェミニストネットワークを略して名付けて「フェミニネット企画」です。講師・アドバイザーなどのご紹介, 講演会・講座・イベントなどの企画, 編集プロジェクト(企画・立案から印刷まで)など女性問題・女性に関する企画なら何でもご相談に応じます。ご用命をお待ちしています。(TEL 075-414-2238 FAX 441-6905) (中西豊子)



## 《あなたの情報・私の情報》

恒例、フェミニスト企画集団の夏のシンポジウム

フェミニズムと「家族」  
—多様なライフスタイルを求めて  
にご参加下さい日本女性学研究会フェミニスト企画集団  
善積京子

とかくこれまで、〈家族〉は社会の基本単位とされ、離婚届に基づく父母子そろった家族のみが健全であり、それ以外の形態は逸脱もしくは病理とされてきた。ところがこの〈家族〉が、いまフェミニズムから女を抑圧するものとして攻撃されている。現在日本の家族状況を捉えた「幻想家族」「潜在崩壊家庭」という言葉で象徴されるように、「男は外、女は内」といった性別役割分業に根ざした〈近代家族〉は崩壊の危機に瀕している。しかしいま問直されているのは、単に夫婦の分業体制だけではない。結婚や家族の枠組みそのものに疑問の矢が放たれている。

〈不倫現象〉に見られるように婚姻外性関係に女性も積極的に関わり出し、DINKカップル・夫婦別姓なども注目を集めている。シングル・友達同士の共同生活・ホモセクシュアルのカップルなど、異性をユニットする従来の結婚と違うスタイルが現われている。

シンポジウムでは、まず基調報告として善積京子(追手門学院大学)が欧米のオールタナティブな流れを紹介する。次に多様な生き方の実践者として田嶋陽子さん(法政大学)と岩崎美穂さん(『地域一家族』の編集長)に体験談を語ってもらい、さらに法律家の立場から星野澄子さん(東洋女子短期大学)に日本の婚姻法が如何に女の生き方を縛っているかを報告していただく予定である。

とき 7月16日(日) 10:30~5:00

ところ 京都市社会教育総合センター

参加費 2000円(当日受付)

託児あり 予約制 7月14日までに  
(定員15名 先着順)

内容問い合わせ先 075-441-6905

フェミニスト企画集団事務局(松香堂内)

長寿社会を自立して生きるための試み

『だれでもできる老いを防ぐ歌体操 自由になあーれ』

寺島龍子著(1800円)

を出版しました。

生活科学研究所大阪事務所長 近山恵子

早いもので、私の大阪暮らしも1年半になります。脳梗塞で倒れた母との生活を通してケア付住宅の必要を痛感した事と、駒尺喜美さん、小西綾さんのウーマンズハウス構想とがきっかけとなって、現在私は、シニアハウス、ウーマンズハウスを建てる側のスタッフとして動き回っています。住居とディサービスセンター〈遊・友・悠〉のある大阪市西区シニアハウス新町では、24時間緊急対応ができ、1人でも安心して楽しく暮せる住居となっています。たまには母をお任せして映画や赤ちょうちんに行くことも……。

寺島の考案になる楽しいリハビリも老いを防ぐ歌体操を毎日行っていますが、自分も指導者になりたいとの要望が相ついたので、歌体操の教科書を発行しました。

寺島は、中学卒業後、働きながら正看護婦の資格を取った努力家です。寝たきりの闘病生活を経て、老人の自立した生活のために情熱を注いでいます。本書には、あわせて寺島の「あゆみ」を収録し、「歌体操」の意義をより深く理解して頂けるようにしました。是非御一読下さい。また、見学や指導者講習会の御相談も受け付けております。(松香堂で扱っています。)

連絡先 大阪市西区新町一丁目34-5

シニアハウス新町 2F Tel 06-533-1445

結婚改姓についての体験談集ができました!

「これからは別姓結婚 Vol. 1」

結婚改姓を考える会編 緒方由紀子

このパンフは、「女の姓」を守りぬくまでのタタカイの日々の記録です。

夫婦の姓は、結婚する女と男、どちらの姓を選んでも良いタテマエになっています。ところが、結婚した夫婦の95%以上が男の姓を選んでいるのが現実です。

自分の姓が結婚によって奪われることに疑問を感じた女性が、結婚した後も名前を変えずに生活する方法が三つあります。一つは相手の姓を奪うこと。それが嫌なら、始めから婚姻届を出さない「事実婚」を選ぶ。あるいは届を出した後も旧姓を使い続ける「通称使用」を実践する。

あとの二つのやり方が具体的にどんなものかということとは、まあパンフの本文を読んでもらうこととして、ここでは目次からいくつかを選んで紹介しましょう。

「何度も口論」しながら、保守的だった相手の「人生を変えてしまった」という『確信犯的事実婚への歩み』。変えられた側からの手記『本当の“自分”を求めて』は合わせ読まれるべき傑作です。また、『個性が活きる旧姓使用』『通称使用・挫折の顛末』『私の通称(旧姓)使用体験—会社員の場合』の三つを読み比べると、同じ通称使用でも、実践する人や取り巻く状況によって中身が変わってくるものだということが分かります。

結婚改姓については、現在、さまざまな本が出され、ちょっとしたブームの感さえあります。そんな中では出てくべくして出たこの体験談集!ぜひ一読を!

松香堂で取り扱っています。(頒価 300円)

連絡先 〒659 芦屋市若宮町6-2

緒方由紀子

Tel 0797-38-0429

『エミリの窓から』を出しました。

武田雅子

エミリ・ディキンソンはアメリカを代表する詩人で、日本でも高校の教科書に作品が採用されたり、彼女の生涯を描いた一人芝居が岸田今日子さんによって上演されたりと関心を呼んでいます。

全作品1775編の中から愛の詩だけを集めたのが本書です。現在まで数冊の訳詩集が出ていますが、いずれも男性の手になるものでした。女性の訳もあっていいはずだと思い、特に男性の訳者のよく使う女性語を避けて、なお女性独特のニュアンスを生かしたらと願いました。また、最新の研究成果ももりこんだ詳しい注を付けてあります。

ぜひこの新しい選集で、エミリの愛の世界と出会って下さい。

発行: 〒136 東京都江東区亀戸9-18-9-203

峰書房

頒価: 1800円(松香堂で扱っています)

—— フランス通信 ——

国際シンポジウム

『女性とフランス革命』に参加して

国領苑子

今年フランス革命（1789年）の200周年にあたるので、フランスでは、革命にまつわる書物が次々と出版され、記念行事が各地で行なわれています。

これらの一環として、「女性の条件」代表部などの後援を得て、女性史研究者の手によって、ピレネー山脈に近いツールーズ市で、4月12日～14日に、『女性とフランス革命』と題する国際シンポジウムが開催されました。

ベルサイユにデモをかけた無名の女たち

分科会のテーマから内容を概略紹介すると、革命期に活躍したオランプ・ド・グージュ（1789年の人権宣言に女性が含まれていないとして、「女権宣言」を起草）やポリヌ・レオン（「革命共和婦人協会」の立役者）、1789年10月にベルサイユへパンを求めてデモをかけた無名の民衆女性をどう評価するのか、1792年の離婚法の意味、共和制の成立と非キリスト教化、服装や行動様式の変化、当時の文学作品にどのように表現されたか、19・20世紀に生きてきた女性たちがこの革命にどのようなイメージを抱いたか、などとなっています。

市民革命と武器、三色旗は軍国主義か？

このシンポジウムは、2年前から準備され、これまで男性の歴史研究者によって無視されていた資料の発掘やイコノグラフィの重視などが呼びかけられていた

ため、分科会では、個々の史実について新しい解釈が加えられ、綿密な議論が行なわれました。全体会の討論の中では、「女性が初めて市民という意識をもって街頭行動に参加したことは意義があるが、武器をもって闘うことを要求したことは、どう評価すべきなのか」、「三色旗やラ・マルセイユーズは、確かに市民革命のシンボルであるが、今日気をつけないと、他国の国民に対して軍国主義的色彩をもつことすらある」という発言が、印象深く残っています。

フランスの女性学の現状

フランスは、女性学研究組織が未発達なため独自に開催することはできず、国立科学研究所、行政機関、大学などのバック・アップを得て開催されたため、国内に限らず海外10数カ国も含めて約400名の参加者がありましたが、ほとんど専門的な研究者で非常にアカデミックな色彩が強く、女性学の主旨に反するという反発をいくつかの場面で感じましたが、「革命期に活躍した女性のことなど、どの教科書にも書かれていないから、教科書を見直そう。そのためには、歴史を担当する女性教員のポストを増やそう」など実践的な提案がなされたことを聞いて、本当に収穫だったと思いました。

経済大国日本の現状を報告。大きな反響に驚く！

日本からは、日仏女性資料センターのメンバーを中心に



全体会の討論会場



に10名近くが出席し、はるばる参加したので拍手で歓迎されました。私は、「フランス革命の成果と現代」という分科会で、日本型経営の下、大企業で労働者の権利が剝奪されていること、家族主義的な性格からその企業に勤める従業員の妻の私生活すら干渉され、市民として生

きる権利、人権すら侵されている現実を（Cf.『妻たちの企業戦争』社会思想社 現代教養文庫）、「トヨタ」の例を引いて説明し、フランス革命に確立された人権思想、民主主義の原理がどのようにもつと豊かに発展させられていったのかその後の歴史が学びたいと話したところ、日本について「奇跡の経済繁栄」とか「理想的なモデル」とかと言われるのをよく耳にするけ

れど、「事実がよくわかった」とか、「お父さんが残業で忙しく、子供の面倒をみられないとか、テレビで見たけれど、本当なんです」と言って握手を求められ、意外な反響に驚きました。

私は、こうした企業のあり方が、日本国内では、共働きを妨げ、したがって女性の解放を遅らせ、また男も含めて人間らしい生き方を歪めているのだし、がむしゃらな生産性追求による他国の経済市場の侵略が（フランスでは、音響機器、カメラ、電算機、複写機などのシェアの大半を日本企業が独占）、失業率の増加の一因ともなっていると思うので、これからも何らかの形で国際交流の場があれば、日本の実情を話していきたいと思いました。

〔筆者紹介〕

こくりょう そのこ フランス文学・女性学専攻

『妻と夫の社会史』『路地裏の女性史』共訳書など。



サンキュロットの女性

## わたしの出会った本

ポーラ・ギディングス著  
河地 和子 訳

### 『アメリカ黒人女性解放史』

時事通信社

岩本 裕子

### アメリカ黒人女性 解放史



ポーラ・ギディングス著  
河地和子訳

アメリカ社会において黒人と言えば必ず男性、女性と言えば常に白人、というこれまでの状況の中で見直されるべき「黒人女性」に関する概説書の翻訳である。'84年にアメリカで出版された時点ですでに話題となり高い評価を受けた本である。黒人であり女性であると言う二重の差別を受けてきた黒人女性を、人種と性の両輪を結ぶ輪どめのくさび（lynch-pin）としてプラスイメージで捉えようとした好著である。その強さを誦い、アメリカ史の中のこれまで無視されてきた領域に一つの光を与えようとした試みでもある。

アメリカ女性の中での「マイノリティの中のマジョリティ」と言われつつも、他のマイノリティに比べ人種偏見を最も強く感じてきた黒人女性、人種差別の大半を集中して受けてきた黒人女性の歴史をたどっている。個々にあげられた女性はこれまでアメリカ史はもちろん女性史にも登場しなかったような女性達だが、彼女達が現在にまで与えた影響、残した遺産は、計り知れない。アメリカ社会ばかりでなく、我々日本においても生き方そのものを問われる問題作であろう。

歴史書として評価するならば、原書の段階での用語や歴史家の名前間違いなどもあり様々な批判を受けるかもしれない本書も、黒人女性の存在をアメリカ社会へ問うた書としてその価値は大きいと言える。河地氏による手堅い訳は著者ポーラ・ギディングスの、黒人女性をアメリカ史の中に位置づけたいという強い思いを十分に伝えている。邦題は原題とは異なり訳者の意図が伺われる。ちなみに原題のまま訳すならば、『いつ、どこでことを始めるか』であり、副題には「黒人女性；アメリカ社会における黒人・女性に与えたその影響」とある。

アメリカ黒人女性史に関しては、現在まだこのような概説書あるいは通史を必要としている段階であることを最後に付け加えたい。

（いわもと ひろこ 大学助手）

連  
載

## ミニコミの女たち

## 第28回

## &lt;新しい家庭科—We&gt;

ウイ書房

半田 たつ子



調布市西つつじヶ丘の静かな住宅地、我家の門に手がきの小さな看板をはりつけて、ウイ書房は在る。二階の洋間が編集室なのだが本は廊下にはみだし、階段下に積まれ、ガレージは倉庫を兼ね……。出発の時、うちの入室から始めることを勧めたわが夫は、苦笑い。自慢じゃないが、日本で一番小さな出版社、ここにあり……。だ。

働く人、代表取締役兼編集長兼小使いの私のほか、30代、40代の女性4人、みんな家庭をもち、2人か3人の子供がある。週に2日、3日、4日、5日と、家庭の条件、自分の勉強との折合いのつく働き方をしている。それぞれの子供は三歳から、幼稚園・小学校・中学校。高校・大学、そして、もうすぐ出産を迎える私の娘まで、ひろーい年齢幅がある。

男女の自立を願い、人間らしい生活を追求し、差別のない社会の実現を志す、それも、抽象的な理念でなく、自分の問題から出発しようとする雑誌を編むために、これは願ってもない人的条件だと思う。

その雑誌とは？ その名を「新しい家庭科—We」という。私はかつて「家庭科教育」という雑誌の編集長だった。今は亡き市川房枝氏とともに家庭科の男女共修運動を始めたことから、文部省の傘の下で安定を図ろうとする社長と対立し、そこを辞めた。私を支持し、私に新しい雑誌を出させようという、大勢の方のバックアップのもとに、私は船出した。新しい家庭科は、文部省や学者が作るものではなくて、生きている、暮らしている私達 (We) が作ろう、との意気込みと、大勢の人々の力で生まれた私達 (We) の雑誌であることを表現したかったのである。

創刊の言葉に、私はこううたった。

「くらしが歪み、教育の荒廃が進む中で、子供たちは苦しんでいます。あえいでいます。人間が生きていく上

で、最も大切な教育が忘れられているのです。

子供たちに、人間らしい生活とは、どんな内実を持つものなのかを知らせ、その力を創り出す力を培いながら、生活をいとおしむ感受性を豊かに育みたい。男も女も、生きる上で一番大切なことは何かを、学校教育の中ではっきりつかませたい。そう願う人が確実に増えてきました。

一方、女性差別が生まれてこの方の長い歴史には、いま光が指そうとしています。女も男も、自由な個人として生きるために、固定的な性別役割分担意識を、教育によってつき崩さなければならないことが明らかになったのです。

自分の生を、だれかによっておとしめられたくない私たち。

自分の生を、自分で引き受け、うたい上げたい私たち。差別のない社会を築きたい私たち。

いま、点の存在を脱して、線となり、輪を結びました。

『新しい家庭科—We』は、私たちが蓄えてきた力量を示すものとして、ここに生まれるべくして生まれたのです。」

それから8年。家庭科を男女が学ぶ時代が目前に迫っている。家庭科教師は視野を広げ、市民はほんとうの家庭科創造のために、力を貸そうとし、読者による「Weの会」の活躍も目覚ましい。『家庭科新時代』『子ども発、大人へ』など、連載から10冊を越す単行本も生まれた。ミニ出版社ながら志はでっかい。

連絡先：〒182 調布市西つつじヶ丘2-25-14

Tel 03-326-1380 ウイ書房

「We」年間購読料 6900円+消費税207円  
松香堂に常備しています。



## 現在ウイメンズ ブックストアで扱っているミニコミ

(第30号発行後に入荷したもの)

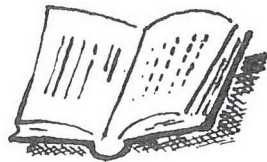
- 「れ組通信 No. 23—女たちよ、誉めあおうほか」  
れ組スタジオ東京 1989年2月 400円
- 「れ組通信 No. 24—99ファッション考ほか」  
1989年3月 400円
- 「れ組通信 No. 25—ヤンチャなあたしたちは今日も元気！女のフェスティバル報告ほか」 1989年4月 400円
- 「あごら139号—女にこだわる女たち」  
1989年3月 400円
- 「WIFE No. 216—特集 海外赴任ほか」  
1989年3月 450円
- 「WIFE No. 217—特集 大人が学ぶときほか」  
1989年4月 450円
- 「We 4月号—特集 何をねらうか「生活科」」  
1989年4月 550円
- 「We 5月号—特集 内申書—その功罪を問う」  
1989年5月 567円(本体550円)
- 「婦人通信3月号—20代は何を考えているか、何も考えていないかほか」  
日本婦人団体連合会  
1989年3月 250円
- 「婦人通信4月号—私の退職金、世界の女性科学者ほか」  
1989年4月 250円
- 「婦人通信5月号—私の仕事〈音楽、放送、新聞、雑誌〉ほか」  
1989年5月 250円
- 「行動する女 No. 32—都立高校男女定員差別を問うほか」  
行動する女たちの会 1989年2月 200円
- 「行動する女 No. 33—高校男女同数定員を求める要望書を東京都教育長に提出。別姓時代の女・男・子どもほか」  
1989年2月 200円
- 「月刊家族第36号—〈家族からの解放〉ほか」  
1989年2月 200円
- 「月刊家族第37号—特集 企業・転勤・家族、新連載みおこロジー(市民的不服従)ほか」 1989年3月 200円
- 「月刊家族第38号—ブラジャーを焼く女たちほか」  
1989年4月 200円
- 「シネマジャーナル No. 9—特集 '88読者の選ぶ実感ベストテンほか」  
ぐるーぶシネマテス  
1989年1月 400円
- 「れ・ふあむ No. 22—愛することについて。働くことをめぐって。暮らしをつむぐ。評論・小説」  
女性問題研究会 1989年3月 500円
- 「野合(愛と性について考えるミニコミ) Vol. 7—お正月ほか」  
1989年2月 100円
- 「野合 Vol. 8—朝まで“性”テレビほか」  
1989年3月 100円
- 「野合 Vol. 9—朝まで“性”テレビPART II」  
1989年4月 100円
- 「フェミニズム源氏物語「空蟬論」—もののあわれと思われた光源氏は強姦魔だった」町野美和 ゴムユキ企画  
1989年3月 1000円
- 「いまこそ語ろう！天皇問題—有楽町マリオンでの集会報告」  
国家秘密法に反対する女性の会  
1989年3月 300円
- 「密室育児からの脱出—子持ち女の声をあげよう」  
あんふあんで編 1989年4月 1000円
- 「老いを防ぐ歌体操—自由にゃーれ」(11頁参照)  
寺島龍子 生活科学研究所発行 1800円
- 「女性空間 No. 5—特集 母性を考えるほか」  
1988年3月 500円
- 「女性空間 No. 6—特集 フェミニスト文学批評」  
1989年3月 800円
- 「女性空間 No. 1(450円)No. 3(450円)No. 4(500円)」  
在庫あります。
- 「Let's チャンス—再出発の手引き」  
(再就職のためのデータファイルもついて実用的)  
cif 主婦の再就職センター 1989年3月 800円
- 「おんなとおこの女性論1989年報—『女性論』が提唱する生き方諸相ほか」同志社大学宗教部公開講座(1988年版 500円)もあります。  
1989年3月 600円
- 「学会ニュース第35号—視覚イメージの政治学ほか」  
日本女性学会 1988年8月 300円
- 「沖縄県女性史研究第5号—ユタ・女性・戦争」  
沖縄女性史研究会 1983年8月 500円
- 「沖縄女性史研究第6号—沖縄戦・それから40年」  
沖縄女性史研究会 1985年12月 500円
- 「沖縄女性史研究第7号—戦争で変わった人生ほか」  
1988年12月 500円
- (以上の沖縄女性史研究は再入荷致しました。)
- 「婦人通信 No. 204(社会主義婦人会議)—性暴力を許さない女の会」結成ほか」  
1989年2月 300円
- 「婦人通信 No. 206—女の労働・わくわく講座ほか」  
1989年4月 300円
- 「なんとかしくなくちゃ—あかねグループ奮戦記7年のあゆみ」  
あかねグループ編集部 1989年2月 1000円
- 「これからは別姓結婚 Vol. 1」  
結婚改姓を考える会  
1989年3月 300円
- 「誰にでもわかる女と政治 改訂版」  
安東尚美  
1989年4月 1000円

## — 書 評 —

現代のエスプリ 261

## 『夫婦別姓時代を生きる』

福沢 恵子 編



至 文 堂

「結婚」することが決まると、その当人は、矢のような質問——「どこで知り合ったの?」「何やってる人?」「いつ決めたの?」etc.——を受けるのですが、最近、次のようなこともよく質問されます。「姓はどうするの?」このような時期に、タイムリーな本が刊行されました。16人の発言からなるこの本、思わずフムフムと、読み進んでしまいます。

まず第一に、夫婦別姓に関する今の状況が、わかりやすく整理されています。例えば一口に別姓支持といっても、「アイデンティティ派」「ダブルネーム派」「家名存続派」と多種多様。それらを整理しつつ、生まれた背景も明らかにしています。そのほかに、歴史的な流れ、他の国の状況、いろいろな立場での実践記録、今後の行方などが、それぞれコンパクトにまとめられており、多角的に分析されているのです。

そして第二に、別姓法制化に賛成する声、そして時期尚早として法制化に反対する声、両方が掲載されています。このように、双方の意見が同一の場に提示されると、今後どのような道を歩めば良いか、読者にはおのずとはっきりとしてきます。

さらに、実践が可能なように、丁寧な手引「今日からできる別姓ライフ虎の巻」がついています。もっとはやくにこれを読みたかった、と思う人も多いのでは。事実、私のそばには、これを片手に別姓実行中の人もいるのです(もっとくわしく書いてある「上級編」が欲しいとの声もあり)。「生き方の多様性を認める社会」の必要性についても考えさせるこの本、「別姓」について、少しでも関心のある人には、必携、オススメです。

本書で、田辺聖子さんは「ゲリラ戦」を推奨していますが、私のまわりでも、〈明るいゲリラ〉が年々増えています。みなそれぞれの立場で、それぞれの「別姓」に取り組んでおり、お互いの情報交換も盛んです。大家さんからは、表札のことを注意され、会社では、伝票の名前についていろいろ言われる。でも、持ち前のパワーで明るく、戦術を変幻しながら、日々を過ごしています。編者の福沢恵子さんが、「たかが自分の姓を名乗り続けることにこれほどのエネルギーを必要とするのは、やはりどこかおかしい」と発言していますが、〈明るいゲリラ〉たちも、自然にこのように思っているから、強いのかもかもしれません。

という私も、〈明るいゲリラ〉志願の一人です。

坂本 純子(編集者)

## 編集室から

上記の書評欄へ投稿をお待ちしています。

女性の目で見直した鋭い批評や、視点を変えたユニークなものをお寄せください。

400字詰原稿用紙に2枚、900字前後です。住所とお名前、電話番号も原稿用紙にお書き添えください。掲載させて頂いた方には薄々謝、進呈致します。

「あなたの情報・私の情報」とコラム「私の出会った本」をあなたの主張、伝えたいこと、知って欲しい本、御意見等に御利用ください。600字以内。住所とお名前、電話番号を原稿用紙にお忘れなく。但しこの欄は申しわけありませんが薄々謝も差し上げられませんので念のため。誌面の都合で短くすることがあります。

宛先は 602 京都市上京区下立売通西洞院西入松香堂書店「ウイメンズ ブックス係」です。

上記両方とも次号の締切りは 1989年7月20日。

◎ここ数年、家族に関する本が際立っています。その提出する問題は女性の「姓」と夫婦別姓問題、女性の自立と家族、単親家庭の問題など目白押しに本が出ています。小説を含む多くの本をリストアップしましたのでご参照下さい。

◎また、家族に関して7月16日(日)に京都でシンポジウム「フェミニズムと『家族』」が開かれます。11頁をご参照下さい。

◎本号から秋山洋子さんによる連載「おんなの本・中国」がはじまりました。またフランス革命200周年のシンポジウムの海外情報も届いています。

◎次号は1989年8月20日発行の予定です。(木下明美)